

主題	内出血ゼロを目指す		
副題	～データ分析をもとに自分たちの介護を変える～		
リスクマネジメント		職員の意識改革	
研究期間	12ヶ月	事業所	特別養護老人ホーム 台東
発表者：前島 雅紀（まえじま まさのり）		アドバイザー：	
共同研究者：佐治 貴子（さじ あつこ）			
電 話	03-3843-4435	メール	taitou@seifuukai.or.jp
FAX	03-5807-5738	URL	http://www.seifuukai.or.jp

今回発表の事業所やサービスの紹介	特養台東(SS・デイ・包括・居宅介護支援を併設)はJR秋葉原駅・徒歩7分の立地にある14階建ての複合ビルの4・5階にあります。地階から2階までが子ども家庭支援センター・貸会議室・トレーニングルームなどの区民施設となっており、6階以上はUR住宅となっています。周りには大小のビルが立ち並びオフィス街となっており、いわゆる都市型特養の典型と言える施設です。
------------------	--

《1. 研究前の状況と課題》

【現状】いわゆる事故報告書に替わるものとして「状況報告書」を作成しているが、一番多い内容が「内出血」の発生であった。件数が多いということ自体が問題であったが、特に問題となったのは以下の点であった。

- ① 同じ部位に発生している。(中でも前腕部、手首、手の甲、手の指で数多く発生していた。)
- ② 同じ利用者の同じ部位に発生している。
- ③ 発生原因が特定できないものが多い。

【課題】介助中に発生したものもあれば、本人の自発的動作により発生したと思われるものもあったが、「内出血」の発生が職員の中で日常化してしまい、その時々の原因分析と対応は行っているものの、表面的、一時的な対応に終始し、根本的かつ継続的な対応ができていないという点が一番の問題であると思われた。

《2. 研究の目標と期待する成果・目的》

【目標】「状況報告書」から収集した内出血にかかるデータの分析結果をもとに「根拠にもとづくケア」の重要性を全職員で共有する。また、「内出血」に関する知識やそれを回避するための介護技術を身につけてもらう事で内出血の発生をできる限り少なくすることを目標とした。

【期待する成果】

- ① 勉強会を開催し、データを確認しつつ「内出血」についての正しい知識を学ぶことで「内出血」に対する意識を高める。
- ② ロールプレイ学習を通し、利用者の立場に立った介助時の注意点を体で覚えることで介護技術の向上を図る。



結果として、内出血の発生件数が減少する

《3. 具体的な取り組みの内容》

【対象】4階利用者25名

①状況報告書をもとにデータを作成

各利用者における内出血の発生件数、部位、場所、曜日、時間帯などを調査し、基礎データを作成した。それらのデータをもとに個人およびユニット、フロアにおける発生特徴を分析し一覧表にした。

②1回目の勉強会(24年11・12月に実施)

①で作成した一覧表で内出血の発生状況を確認しながら、相談員、機能訓練指導員、看護職員を交えユニット単位で意見交換を行った。

③2回目の勉強会(25年1月に実施)

参考文献をもとに作成した資料を使用し内出血の発生機序等を学ぶとともに、ロールプレイを通しそれぞれの職員の介護方法をチェックした。

④3回目の勉強会(25年2月に実施)

繰り返し起きている原因が特定できない内出血についての事例検討会を実施。居室などの生活空間を写真に収め、①で作成したデータなどをもとに考えられるリスクは何処にあるかなどについて検討した。

④勉強会前後の内出血発生状況を確認

取り組み前3ヶ月間の発生件数が26件だったのに対し、勉強会終了後3ヶ月間の発生件数は13件であった。明らかに発生件数が減少したことを職員に伝えるとともに、さらに意識して取り組んでいくことを確認した。

＊勉強会資料は看護師に相談し作成。

＊ロールプレイ資料はPTに相談し作成。

《4. 取り組みの結果と考察》

現状を正確に把握し職員全員で内出血と向き合ったことで発生件数の減少という目に見える効果が表れた。また、現状分析をもとに根拠のある介護を行うことの必要性和重要性を改めて認識することができた。

《5. まとめ、結論》

今回の取り組みを通し、職員の介護技術やリスクに対する予測力が少なからず向上した。何より具体的な取り組みにより内出血の発生件数が減少したことの意味は大きい。

今後も感覚的な対応ではなく、データや正しい知識に基いた根拠ある対応を行うことで自分達の介護力が実感できる取り組みを行っていきたい。

それには様々な情報をデータ化する労力と、それらを分析する力が求められる。引き続き利用者のケアにかかるさまざまなデータを集積・分析し、そこから見えてくるものを生かしたケアを行うことで利用者の生活の質の向上を目指したい。

《6. 倫理的配慮に関する事項》

なお、本研究発表を行うにあたり、ご本人（ご家族）に口頭にて確認をし、本研究発表以外では使用しないこと、それにより不利益を被ることはないことを説明し、回答をもって同意を得たこととした。

《7. 参考文献》

・南江堂 「今日の治療薬 2011」

・東京都社会福祉協議会

「お年寄りの病気の知識」

・全国社会福祉協議会「ふれあいケア」

・照林社「最新 褥瘡ケア」

《8. 提案と発信》

今回の取り組みで、職員の意識が変わればケアが変わるという事とひとつの事を突き詰め真剣に取り組んで行くことがサービス向上の一番の近道であることを改めて学んだ。

【メモ欄】